



Title	狩使本伊勢物語の復元本文
Author(s)	林, 美朗
Citation	国語国文研究, 137, 1-22
Issue Date	2010-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93270
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_137-01-22.pdf



狩使本伊勢物語の復元本文

林 美 朗

一 はじめに

筆者は平安時代末期に確かに伝存していたと目される、狩使本伊勢物語の姿を能う限り精確に復元した『狩使本伊勢物語——復元と研究——』を平成一〇年に和泉書院から上梓した。しかしあくまで校本という研究書であり、その校本篇にも、刊行時に簡単な正誤表を付したものの、その後、多くの誤植や誤り、不備な点が見つかった。既にその一部は、いろいろな方々に御指摘を頂いているが、この際、ここに具体的に狩使本伊勢物語の本文を一举掲載し、後学に資することにしたと思う。なお本稿は、平成二一年度第二回中古文学会関西西部例会（第二十三回・於奈良女子大学）で口頭発表したものに基づいている。

二 復元本文校訂の基本指針・章段序の確認等（凡例）

n+2次本 n+1次本 n次(復元本)		
23	117△	72
24	99△	116
	G	74△
	I	75
J		121▼
6		B
K△	K	36
	L	71
	M	119
	N	O
	P	92
R		86
S	Q	88
		60
		27
		109
		E
		105
	30/28	106
		61
		97
		100
		50▼
		63
		73
		11
		△:取数増

n+2次本 n+1次本 n次(復元本)		
47	9△▼	14
	12	8
		9▼
		39
		88
		4
		5
		107
		87
		40△
		96
		118
		82
		83
		85
		84
		86
		1
		93
		94
		67
		43
		44
		101
		80
		81
		A
		114
		64▼
		111▼
		115
		65
		76
		78
		79
		▼:取数減

まず前掲の校本を最大限に利用し、かつて想定した章段序(右表・数字は通行本章段番号、アルファベットで示したものは通行本に見えない章段)に従って、章段表示の次に一番主とした資料名を明示し、適宜漢字と句読点を私に付し、4頁の47段など後から竄入したと考えられる章段については、数字下げにするなどして区別して、狩使本伊勢物語の本文を一挙記載した。一番主とした資料の伝本略号は次の如くである。

為 参考伊勢物語 所引為家本(昭和三年岩波文庫本)

雅 雅平本業平集(片桐洋一編『伊勢物語の研究(研究篇)』に紹介されているところに拠る)

天 天理図書館蔵伝為家本付載十八章段本文(天理図書館善本叢書3)

小 大島雅太郎氏旧蔵伝為氏筆本付載二十四章段本文(岩波書店『異本伊勢物語』)

絵 異本伊勢物語絵巻(慶応義塾大学図書館蔵『伊勢物語絵詞』写真紙焼本)

切 片桐洋一『伊勢物語の新研究』・小松茂美『古筆学大成』23所収

大 大島雅太郎氏旧蔵伝為氏筆本原本本文章段(岩波書店『異本伊勢物語』)

皇 大島雅太郎氏旧蔵伝為氏筆本付載十二章段本文(岩波書店『異本伊勢物語』)

神 神宮文庫本系諸本、阿波国文庫旧蔵本(宮内庁書陵部写真紙焼本)で代表

また最初の69段2行目のように、本来勢語の本文とは考えられない注記の本文文化が考えられる部分等は()内に補って補足し、4頁の77段2行目のように明らかに依拠資料の間違いや誤読と思われるものは、筆者の記載上の誤りでないことを示す「ママ」の記載を近傍に付し、諸本間で異なるある本文は、77段の「きたのこ」に対する「多加幾子イ」のように異同を注記した。

なお、次表の(a)は、皇太后宮越後本からの付載の十二(四)章段、(b)は神宮文庫本系諸本に付載の十四章段であるが、一部を除き、ほとんどが先の復元狩使本と重複しているゆえ、これをも一応、狩使本系の一亜型と看做しておくことになろうと思う。かつて福井貞助が小式部内侍本(狩使本)本文の方が転々流布した形になっている旨を述べられ(『伊勢物語生成論』昭和四〇年・有精堂)、内田美由紀も「皇太后宮越後本はそれ(筆者注・小式部内侍(狩使)本を指す)をより明確な本文に改めようとしたもの」(『伊勢物語』小式部内侍本)の本文について(中古文学三十周年記念懸賞論文)平成九年三月)と、どちらかと言うと狩使本→皇太后宮越後本の線で

(b)	(a)
117	117
115	115
116	116
B	B
C	C
114	114
119	D
O	E
R	F
S	37
N	G
I	30/28
M	118
	119

考えられている所以からである。その際、最初の表で、重複段は一応、イタリックで表示しておいた。また119・R・S・S^{30/28}段は、存在位置が不明確ゆえ、71から106段の間にまがりなりにも想定・復元本文もイタリックで表示しておいた次第である。

ただ49・22・32・Tの諸段は、存在位置を示唆する資料がほとんどないため、どこに位置していたかは全くわからない（が、間違いない存在はしていた）ことを付け加えておきたい。また狩使本系の今一つの付載資料（KAFMPの五章段を載す）である山田孝雄博士旧蔵本は、現行の天理図書館蔵伝為家筆本卷末（97オウ）に何らかの形で接触した形跡が桑原博史により指摘されている（伝為家筆本伊勢物語の落丁について「未定稿5号・昭和三三年八月」）ことも付け加えておくことにしたい。

元々現存しない諸本であるので限界はあるが、次に掲出する本文・次第を、一応現時点における狩使本伊勢物語の本文として認定・掲載しておく。

三 狩使本伊勢物語の復元本文

69（為）

昔男有りけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、この伊勢の斎宮なりける人の御おや三条の町惟喬の御子の母なり、つねのつかひよりは此の人よくいたはれといひおこせたれば、おやのことなりければ、いとねんごろにいたはりけり。あしたにはかりにいだしして、やり、ゆふべにはかへりつゝそこにこさせけり。かくてね

んごろにいたはりけり。二日といふ夜、おとこわれてあはんといふ。女もてはなれてしもおもはず。はたいとあはじともおもへらず。されども人目としげゝればえあはず。女、人をしづめて子ひとつばかりにおとこのもとにきたり。おともまたねざりければ、とのかたを見出してふせるに、月のおぼろなるに人のかげのしければ見出しければ、ちいさきわらはさきにたてゝ人たてり。男いとうれしうて、我がぬるところにゐて入りぬ。子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬに帰りにけり。男いと悲しうて寝ずなりにけり。つとめて、いといぶかしければ、我人をやるべきにしもあらねば、心許なくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとよりことばゝなくて、

君や来し我や行きけんおぼつかかな夢かうつつか寝てか覚め
てか

これを見ていとくゝなきて詠める。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとはよひとさだめ
よ

と詠みてやりて、狩に出でぬ。野にありけど心は空にて、こよひだに人しづめていとくゝあはんと思ふに、国の守、いつきの宮のかみかけたりければ、狩の使ありと聞きて夜一夜酒飲みしければ、もはらあひごともせで明けば尾張の国へ立ちぬべければ、男も女も血の涙を流せどえあはず。夜やうく明けなんとするほどに、女の方より出だすさかづきに、さらに歌を書きて出だしたり。と見れば、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書きて末はなし。そのさかづきの血に、つきまつの墨して歌の残

りを書き継ぐ。

また逢坂の関も超えなん

とて明くれば尾張の国へ超えにけり。(斎宮は水尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の御子の妹なり。恒子内親王貞觀元年卜定。)

16 (雅)

年ごろあひかたらふ人の、いみじう老いみわろきことを思ひて、いづかたにいかせむと思ひ顔にて、めの尼になるべきことを言ひて、手を折りて経にける年をかぞふればよつといひつゝとをぞ経にける

尼のさうぞくをいとうしてやるとて、

年だにもとをづゝよつは経にけるをいくたび君を頼みきぬらん

と言ひにやりたりしかば、いみじう喜びて、

これやこの尼の羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

また、女の尼になりしにやりしに

102 (為)

昔男有りけり。歌はえ詠まざりけれど、世の中をば思ひ知りたりけり。あてなる女の世の中おもひうむじて尼になりて、京にもあらず、はるかなる山里に住みけり。もとしぞくなりければ、よみてやりけり。

そむくとして雲にはのらぬ物なれど世の憂きことぞよそにな
るてふ

となん言ひやりける。

77 (為)

むかし田むらの帝と申ける、おはしましけり。そのときの女御、き^多たのこと申す御^ミかどみすがりけり。その女御うせたまうて、安祥寺にてみわざしけり。人ぐゝの奉りあつめたる物、ちさづげばかりありけり。そこはこのさづげ物を木につけて堂のまへに立てたれば、さらに山を堂のまへに立てらんやうになん有りける。それを右大將にいまそがりける藤原の常行と申すいまそがり。講終はるほどに歌詠む。人ぐゝをめしあつめて、けふのみわざを題にて春の心ばへしたる歌たてまつらせたまふ。右馬頭なりけるおきなめがひてよめる。

山のみなうつりてけふにあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、今見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりたりけん、あはれがりけり。(むかしの女御をばかくぞ申しける)。

103 (為)

昔男有りけり。(その男)いとまごゝろにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になんつかまつりけるころ、あやまりやしたりけむ、みこたちのつかうたまひけるをあひはべりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成りま
さるかな

47 (雅)

ある女、あだなりと聞きてかくいひたり。

おほぬさの引く手あまたにとまらねばおもへどえこそた

のまざりけれ

かへし

おほぬさと名にこそ立てれ流れてもつゐによる瀬はあり
てふものを

8 (絵)

昔男、京や住みうかりけむ、東の方へ行て住み所求むとて、友とする人一人二人して行けり。信濃国、浅間の嶽に煙立つを見て詠める。

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やは咎めぬ

9 (絵・天)

昔男有りけり。身をえうなき物に思ひて京にはをらじとて、東の方に住むべき所求めに行くに、もとより友とする人一人二人して行けるに、道知る人もなくてまどひ行くに、三河国八橋といふ所にいたりにけり。其の渡(り)を八橋と言ひける事は、水の出で様のくもでなれば、橋を八つわたせばそれによりてなん、八橋とは言ひける。其の河に杜若面白(く)咲きたり。其の河の木の下に降りゐて、かれいゐる食ひけり。この花を見て、京いと恋しくおぼえけり。さりければある人、かきつばたといふ五文字を句の首に置きて、旅の心を詠めと言ひければ、ある人の詠みける。

から衣着つゝなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をし
ぞ思ふ

と言ひたりければ、皆□れいゐの上に涙落ちて、ほとびにけり。行き／＼て、駿河国に至りぬ。富士の山を見れば、早苗月の晦日、雪いと白う降るを見て詠めりける。ある人、

時知らぬ山は富士の峯いつとてか鹿の子まだらに雪の降る

らん
となん詠みける。

うつつの山に入りて見れば、我入らんとする山には見えければ、いと暗う細きについくゞりて入りけり。もの心細う、すゞるなる目を見らと思ふに、修行者会いたり。京にその人の許にとて、文書きて付く。

駿河なるうつつの山辺のうつゝにも夢にも人に会はぬなり
けり

なを行き／＼て、武蔵国と下総国との中におほきなる河あり。其の河をばすみだ河となんいひける。其の河のほとりにむかひゐて思ひやれば、かぎりもなくとをくもきにけるかなと思ふに、渡し守、はやふねにのれ、日も没ぬといひければ、みなひとものわびしうて、京に思ふ人なきにしもあらねばあはれと思ふに、白(き)鳥の、はしと足と赤うて鴨のおほきさなるがあり。水のうへにあそびつゝ魚を喰う。此れは何鳥と問ひければ、都鳥といふを聞きて、

名にしおはゞいざことゝはん都鳥我が思ふ人ありやなし
やと

といひければ、ふねこぞりてなきにけり。

そのかはのわたりすぎて、京に見し人会ひて物語などして、ことづてやなどいひければ、

都人いかにと問はゞみねたかみはれぬおもひにわぶとこたへよ

14 (絵)

昔男、みちのくにゝすゞろにいきたりければ、そこなる女、

京の人をば目驗にや思ひけん、せちに思ひつる心なんありける。さてかの女、

なか／＼にこひにしなずはくわこにぞなるべかりけるたまのをばかり

といへりければ、さすがにあはれにや思ひけん、行て寝にけり。夜深くいでにければ、

夜もあけばきつにはめなでくたかけのまだきになきてせなをやりつる

12 (絵)

昔男ありけり。人の娘を盗て武蔵野を行くに、盗人なりければ、国の守に捉えられにけり。女をば叢の中に置きてにげれば、道行く人、此野には盗人ありとて野に火をつけんとす。女わびて、

むさし野はけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれもこもれり

39 (雅)

ある宮のうせたまへる葬送の夜、まづ女の車に乗りて、乗せたまつりしほどに、源のいたるといふ人の、え知らでほたるをとらへて、車に女やあるとていれたりしに、ともすとすれどきえなむずとてよみし。

いでゝいなば限りなるべみともしけちとしつむなぬかなく声をきけ

68 (雅)

津の国住吉の浜にて人の詠みしに、ある人住吉の浜といふ心を加へ

て海辺ゆくを詠めといひしかば、

雁なきて菊の花咲く秋はあれど春は海辺に住吉の浜

4 (絵・天)

昔、東五条の后と申す御座けり。其の西の対に住む人有りけり。其れを本意はあらで行き通ふ人、志いと深うて有りけり。時は親月の句許、梅花ざかりに其の語らひける人、忍びて行きける方も知らず、音もせずなりにけり。あり所は聞けど、他の行くべき所にしもあらざりければ、なをうしと思ひつゝ、又の年の親月に彼所に花盛なるにありし所に行きて、こそこのいとこひしかりければ、立ちて見、みて見れども去年には似るべくもなし。うち泣きて、月のかたぶくまで高なる板敷に臥せりて、去年を思ひ出で、言ひける。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にしてと言ひてこの花のもとに立ち寄りて、

梅の花香をのみ袖にとどめつゝ我が思ふ人はをとづれもせず

と言ひて、ほの／＼と明るるに帰りにけり。

5 (絵)

昔、東の五条わたりに忍びて行く人有りけり。忍ぶ所なりければ、門からはえ入らで、童部の踏み開けたるついちの崩れより入りけり。人高しからねど度重なりければ、あるじきゝつけて、其のかよひぢに人すゑて盼けり。此男、毎夜に行きけれどもえ会はでなん。

人知れぬ我がかよひぢの関守はよひ／＼ごとにうちも寝な／＼ん

と詠みたりければ、あはれがりて主許してけり。

107 (為)

昔あてなる男有りけり。その男の許なりける人を、内記に有ける藤原の敏行といふ人よばひけり。されどまだ文はおさくしからず、こと葉もいひしらず、いはんや歌詠まざりけり。されどかのあるじなる人、案を書きて書かせてやりけり。めでまどひにけり。さておとこの詠める。

つれづれのながめにまさる涙河そでのみひぢてあふよしもなし

かへし例の男、女にかはりて、

浅みこそ袖はひづらめ涙河身さへながると聞かば頼まむと言ひければ、おとこいといたうめでて、いまゝでふみばこに入れたありとなんいふなる。男、女のもとに文おこせたり。得て後のことなり。雨の降りぬべきになん見わづらひ侍りぬる。御さいはひあらばこの雨は降らじ、と言へりければ例の男、女に代わりて詠みてやらず。

かずく／＼に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

と詠みてやりければ、蓑も笠も取りあへず、しとゞに濡れてまどひ来にけり。

87 (為)

昔男、津の国むばらのこほり、芦屋の里にしろよゝて住みけり。

昔の歌に、

芦の屋の灘のしほやきいとまなみつげのをぐしもさゝず来にけり

と詠めるはこの里を詠める也けり。ここをなん芦屋の灘とは言ひける。この男、なま宮仕へしければ、それを頼りにて衛府のすけども集まり来にけり。この男の兄も衛府のかみなりけり。その家の前の海に遊びありきて、いざこの山のかみに有りと言ふ布引の滝見に登らん、と言ひて登りてみるに、その滝なり。高さ二十丈余ひろばかり、広さ五丈ばかりある石のおもてに、白きぬに岩をつゝめらんやうになん有りける。さる滝のかみに、わらうだの大きき出たる石あり。その石の上にはしりかゝる水は、せうこうじ・栗のおほきさにてこぼれ落つるをかしこなる人、皆滝の歌を詠ます。この衛府のかみまづ詠む。

わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ違はん

あるじ次に詠む。

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばき

と詠めりければかたへの人、これを笑ふことにや有りけん、めでゝやみにけり。帰り来る道遠くて、失せにし宮内卿もちよしが家の前来るさに日暮れぬ。宿りの方を見れば、あまのいさりする火多く見ゆるに、このあるじのをのこ詠む。

はるゝ夜の星かさはべの蜜かも我が住む方のあまのたく火

と詠みて家に帰り来ぬ。その夜、南の風吹きて波など高し。つとめて、その家のめの子どもいでゝ、女方よりうきみるをなみの寄せたるをたかつきに盛りて、柏おほひて出だしたる柏に、

わたつみのかざしにさすと祝ふも、君がためにぞ惜しまざりけり

みなか人の歌にはあまりや足らずや。

40 (雅)

ある女にすみしを、この女を心けしからずとて親のいみじうのたま(ひ)しかば、いかゞせむとて泣く／＼別るとて、

いとわびて誰か別れのかたからむありしにまさる今日は悲しな

と言ひしまゝに、いみじきこゝちして絶え入りて、またの日の巳の時ばかりに生き出でたりしに、この女を親の送りしに、帰る人につけてこの女、

いづこまで送りはしつと人間はゞあかで別るゝ涙河まで

96 (為)

昔男有りけり。女をとかく言ふほどに月日経にけり。女、岩木にしもあらねば心苦しと思ひけむ、やう／＼思ひつきにけり。そのころ水無月のもちばかりなりければ、女の言ひをこせたる。今は何心もなし、身に嵩も一つ二つ出できにけり、時もいと暑し、少し秋風立ちなん時必ず会はと言へり。秋待つ頃をひにこゝかしこより、その人はその人のもとへいなんとすなりとて、くぜち出で来にけり。さりければ女のせうと、にはかに迎へに來たり。さればこの女、かえでのみちを拾はせて、歌詠みて書き付けてをこせたる。

秋かけて契りし仲にもあらなくに木の葉降り敷くえこそ有りけり

と書ききて、かしこより人をこせばやれとて出でぬ。女また音も

せずなりぬ。さてやがて後、遂に今日まで知らず。良くやあるらん、悪しくやあるらん。いにし所も知らず。かの男はあまのさかてをうちてなん呪ひをる。むくつけきこと、人の呪ひごとは負ふものにやあらん、負はぬものにやあらん。今こそ見めとぞ言ふなる。

118 (為)

昔男、久しう音もせで、忘るゝことなく、今参らと言ひければ、

玉蔓這ふ木あまたに成りぬればたえぬ言の葉嬉しげもなし

H (天)

むかしおとこ、女のうみも着(せ)けるに、釵子をこころざしてやりける。
をなじイ
はせすイ

あまたあらばさし忘るゝと玉くしげ開けんおり／＼思ひ出でなん

82 (為)

昔惟喬の御子と申す、おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮有りけり。年毎の桜の花盛りには、かしこへなんおはしましけり。(右馬頭なる男を常に狩に御座ける。)時世を経て久しうなりければ、その人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで、酒をのみ飲みつ倭歌にかかれり。今狩する交野の渚の家、院ことに面白く、その木のもとにおりみて枝折りて、かざしにして上(中)下歌詠む。右馬頭なりける人詠める。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

と詠みて、木のもとに立ち帰るに日暮れになりぬ。御供なる人、酒を持たせて(野)より出で來たり。その酒を飲みてんとて良き所を求め行くに、天の河といふ所に至りぬ。御子に右馬頭おほまきまい

る。御子宣ひける、交野を狩りて天の河のほとりに至るを題にて歌詠みて杯はさせ、と宣ひければ右馬頭、詠みて奉りける。

狩り暮らし七夕つ女に宿からん天の川原に我は来にけり
御子、この歌をかへすぐ誦じ給ひて、返しはえし給はず。紀有常、御供につかうまつれり。それが返し、

一年に一度来ます君なれば宿かす人もあらじとぞ思ふ
御子に代はり奉りて紀有常、

をしなべて峯は平らになりけり山の端なくは月も隠れじ
83 (為・天)

昔、水無瀬に通ひ給ふ惟喬の御子、例の狩しにおはします御供に、右馬頭なる翁つかまつれり。日ごろ経て、宮に帰らせ給へり。御送りしてとく往なんと思ふに大酒給ひ、禄賜はんとてつかはさざりけり。右馬頭心許なかりて、

枕として草引き結ぶことも多し秋の夜とだに頼まれなくに
と詠みける。時は弥生の晦日なりけり。御子、大殿ごもらで明し給ひてけり。かくしつゝまいりつかうまつりけるに、思ひの外に御髪おろさせ給ひてけり。睦月に拌み奉らんとて小野に詣でたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。しみて御室に参りて拌み奉るに、つれぐと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく候ひて、いにしへのことどもなど思ひ出てきこえけり。さても候ひてしがなと思へらん、公事の有りければ候はで、夕暮れに帰るとて詠める。

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは
と詠みて泣くく来にける。

返歌

85 (為)

夢かとも何か思はん浮世をば背かざりけん程ぞ悔しき

昔男有りけり。童よりつかうまつりける君、御髪下ろし給ふてけり。睦月には必ず詣でけり。公の宮仕へしければ、常にもつかうまつらず。されども年頃をうらなはで、詣でたるになん有りける。昔つかうまつりし人の俗なるをじなる、あまた参り集まりて、睦月なればことさらとて御酒たまへり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすに止まず。人酔ひて、雪に振り込められたりといふ題にて歌有りけり。

思へども身をし分けねばみはかれぬ雪の積もるぞ吾が心なる

と詠みければ、御子いというあはれがり給ひて、御衣脱ぎてかけ給ひけり。

84 (為)

昔男有りけり。身は卑しながら母は皇女也ける。その母、長岡といふ所にすまひけり。子は京に宮仕へしければ、詣づとしけれど、一所さへ有りければ、いとかなうし給ひけり。師走ばかりにとみのことゝて御文有りけり。驚きて見れば、歌のみあり。

老いぬればさらぬ別れも有りと言えはいよく見まくほしき君かな

とありければ、馬にも乗りあへず参るとて、うち泣きて道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別れのなくながなよそと嘆く人の子のため

86 (為)

昔いと若き男、若き女あひはべりけり。をのく親有りければ、つ
つみていひさしてやみにけり。年を経て、女の方よりなをこのこと
遂げんとなんいへりければ、男歌詠みてやりけり。

今までに忘るゝ人は世にもあらじをのがさまゝ年の経ぬ
れば

男女、あひ離れぬ宮仕へになん出立にめる。

42 (雅)

かよひし所にさはる事ありて、久しう行かと言ひやる。

出でゝくる宿だに^{こし}いまだかはらぬに誰が通い路と^{いま}けふはな
るらん

45 (為)

昔男有りけり。人の娘のかしづく、いかでこの男に物言はんと思ひ
けり。心弱く、うち出でんこと難くやありけん、もの病みになりて
死ぬべき時に、かくこそ思ひしかと言ひけるを、親聞きて泣くく
告げたりけれど死にければ、つれゝと籠りをけり。時は水無月
の晦日、いと暑き頃ほひ。今宵は遊びをりて、夜更けてやゝ涼しき
風吹きて、螢のなま高く飛び上るをこの男見伏せりて、

行く螢雲の上まで往ぬべくは秋風吹くとかりに告げこせ。
となん詠みける。

暮れがたき夏の日暮し眺むればそのことゝなくものぞ悲し
き

46 (為)

昔男、いとうるはしき友有りけり。かた時もえさらぬ道に往きにけ

り。月日ぞ経てをこせたる文に、あさましうえ対面せで月日経にけ
ること、忘れやし給ひぬらんと、いといたう思ひわびてなん言へる。
世の中の人のことは、目かるれば忘れぬべき物にこそあれと言へり
ければ、詠みてやりける。

目かるともおもほえなくに忘らるゝ時しなければ面影に見
つ

1 (絵)

昔男、初冠して諸楽の京、春日の里に^ししたより有りて、其の里に
狩に行きけり。其の里に媚たる女はらからども、いと多く住みけり。
其れを此の男、かいまみてけり。おもほえず、ふるさとにいとはし
たなくてはありければ、心地惑ひにけり。しのぶずりの狩衣をなん着
た(り)ける。その裾を切りて歌書きてやる。

春日野の若紫の擦り衣しのぶの乱れ限り知られず
となん家に来て詠める。面白しと思ひけん。昔の人はかくいち早
き推妙をなんしける。

みちのくのしのぶもちずり誰ゆえに乱れそめけむ我ならな
くに

41 (雅)

むつまじき人のをとうとなりし女、心の悪き男を語らひた
りしかば、上の衣やるとて、

紫の色濃き時は目も張るに野なる草木ぞ分かれざりける
2 (雅)

ある女の、この京にありしに弥生的一天ごろ、雨降りしに
やりし。

起きもせず寝もせて夜を明かしては春のものとて眺め暮らしつ

93 (為)

昔男、身は卑しくて便なき人を思ひけり。少し頼みぬべき様や有りけん、伏して思ひ、寝て詠める。

あふなく思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦しかりけり

昔もかゝること有りけり。世のことはりにや有りけん。

94 (為)

昔男女有りけり。いかゞありけん、かの男住まずなりにけり。後に男有りけれど、子ある仲なりければ、細かにこそあらねど、とき／＼物言ひをこせけり。女方に絵描く人なりければ、描きにをこせたるを、今の男のものすとして歌をこせたりけり。かの男いとなつらく、のが聞こゆることを今まで賜はぬは、ことほりと思へども猶人をば恨みつべきもの、などと申して詠みてやりける。時は秋になん有りける。

秋の夜は春日忘るゝ物なれや霞に霧やたちまさるらん

かへし

千々の春一つの秋に向かはめやもみぢも花もともにこそ散れ

67 (為)

昔男、せうように思ふどちかきつらねて、和泉の国へ如月に行きけり。河内の国、生駒の山を見やれば、曇りみ晴れみ、立ちある雲止まず、朝より曇りて昼晴れたり。いと白う、雪木の末／＼にこふ

りたり。それを見てかの行く中にたゞひとつ詠みける、

昨日今日雲の立ち舞ひかくるふは花の林を惜しとなりけり

10 (雅)

武蔵の国まで行きたりしに、その国にある女に物言はんと思ひて、たび／＼人やりしかば、この女の父はこの人に会はせんと思ひてあるを、母は、さ思ひ顔にてかく言ひをこせたり。住む所は、武蔵のさいたまのこほりみよしのゝさと／＼言ふ。

みよしのゝたのむの雁はひたぶるに君が方にぞ寄ると鳴くなる

かへし

我が方に寄ると鳴くなるみよしのゝたのむの雁をいつか忘れん

43 (為)

昔かやうの皇子と申すおはしけり。その皇子女をおぼして、いとかしくめぐみ使ひ給ひけり。人なまめきて有けるを、また人聞きつけてふみやる。ほとゝぎすのかたを書きて、

ほとゝぎすながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから

この女、けしきをとりて、

名のみ立つしでのたをさは今日ぞ鳴く庵あまたに疎まれぬれば

時は皐月になん有りける。おとこ、

庵多きしでのたをさは猶たのむ我住む里に声し絶えずは

44 (為)

昔男、東へゆく人に馬のはなむけせんとして呼びて、疎き人にしあらざりければ、家刀自してさかづきさゝせて、女のさうぞくをかつげんとす。主の男、歌を詠みて裳の腰に結び付けさす。

いで、ゆく君を祝ふと脱ぎつれば我さへ裳なくなりぬべきかな

心とまりてなん書き付けたる。

101 (為)

昔、左兵衛なりける在原の行平といふ有りけり。その人の家にむまき酒有りて聞きて、上に有りける左中弁、藤原の良近といふをんな、まらうどぎねにしてその日はあるじまうけたりける。なさけある人にて甕に花をさせり。その花の中にあやしき藤の花有りけり。花のしなひ三尺あまり六寸あり。題にてその人、歌詠み果てがたに主のはらから、あるじに急ぎて出でたりければ、捕えて詠ませける。もとより歌の心は知らざりければ、すまひけれど、しみて詠ませければかくなん。

咲く花の下に隠るゝ人多みありしにまさる藤の陰かも

などかう詠まと言ひければ、大き大臣の花の盛りにみまそがりて、藤氏人々さかゆるを思ひて詠めるとなん言ひける。みる人聞き知らず、在る人々え詠まず成りにけり。(大き大臣、藤氏のさかゆるとはこのおとゝなり)。

80 (為)

昔おとろへたる家に藤の花うへたる人有りけり。その花の弥生の晦日にいと面白く咲きたりけり。雨の夜に折りて、人の許に奉るとて

詠める。

濡れつゝぞしみて折りつる年の内に春は今日をし限りと思へば

81 (為)

昔左のおほいまうちぎみ、(賀茂河のほとりに)六条の里に家をまたなく造りて住みけり。神無月の晦日、菊の花のうつろへるさかりに、皇子たちおはしまさせて酒飲みし、遊びて夜明けゆくに、この殿の面白きをほむるに歌詠む。そこに有りけるかたみ翁、いたじきの下に這ひありきて、人に皆酔はせ果てゝ詠める。

塩釜にいつか来にけん朝風に釣りする船のこゝに寄らなんとなん詠みける。陸奥に行きたりけるに、あやしく面白き所多かりき。我が御門、六十余国の中に塩釜といふ所に似たる所なかりけり。さればかの翁、さらにこゝをめでゝ、塩釜にいつか来にけんと詠めるなりけり。

18 (雅)

菊の花を折りて、人のがりやるとて、

紅に映るはいつも白雪の枝もたはゝに降るかとぞ見る

A (為)

雨のいみじう降り暮らしてつとめてもなをいみじう降るに、ある人のがりやりし。

降り暮らし／＼つる雨の音をつれなき人の心とものがな

かへし

やゝもせば風に随ふ雨の音を絶えぬ心にかけずもあらなん

114 (為)

昔仁和の帝、芹川に行幸し給ひける時に、なまおきなの今はさることにげなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、おほかたのたかゞひにてさぶらはせ給ひけり。すりかりぎぬの袂に(中將なりける人の歌を)書き付けたる。

翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞたづも鳴くなる

公の御気色悪しかりけり。をのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞き負ひけり。

64 (為)

昔女男、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづこなりけむ、怪しさに詠める。

吹く風に我が身をなさば玉すだれ暇を求めて入らましものを

111 (小)

昔男、亡くなりける女をとぶらうやうにて言ひやれる。

古は有りもやすらむ今ぞ知るまだ見ぬ人を恋ふる物とは

女

下紐のしるしとするも解けなくに語るやことは恋ひずぞ有りける

115 (小)

昔、陸奥に、男女住みけり。男、都へ往なんと言ふ。この女いと悲しむ。馬の餞をだにせんとて、をきのゐて都島といふところにて、酒飲ませて詠める。

をきのゐて身を焼くよりも悲しきは都島辺の別れなりけり

(と詠めるにめで、止まりにけり。)

65 (為)

昔、帝の覚えにて使ひ給ひける女の色許されたる有りけり。大御息所とていまそがりける従姉妹なりける。殿上に有りける男のまだいと若かりける、この女を会ひ知りけり。女方に^{許され}入りたたりければ、女の有る所に来て向かひをりければ、女もいとかたはなり、身も滅びなん、かくなせそと言ひければ、

思ふには忍ぶることぞ負けにける あふにかへばさもあらばあれい 色には出でじと思ひ

しものを

と言ひて曹司に降り給へば、例の御曹司には、人の見るも知らず登りゐければ(彼女思ひ託びて里へ行く。されば何の良き事と思ひて通ふに)見る人聞き笑ひけり。つとめて、主殿司の見るに、脊を取りて奥に投げ入れて登りて、かうかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ遂に滅びぬべしとてこの男、いかにせん、我がかゝる心止め給へと仏神に申しければ、いやまさりにのみ(覚えつゝわりなく恋しければ、さるべき者)かうなきを召し呼びて、恋ひせじといふみそぎはらへの具してなんいきける。もてきてはらへけるまゝに、いと悲しきことのみ数まさりて、物に似ずありしより恋しくおほえければ、

恋せじと御手洗川にせし禊神は受けずも成りにける哉

と言ひてなんいきける。この帝は顔かたち良くおはしまして仏の御名を心に入れて、声はいと尊く申し給ふを聞きて女はいたく嘆きけり。かゝる君につかうまつらで宿世尽きなく悲しきこと、この男にほだされてとてなん泣きける。かゝる程に帝きこしめしてこの男を

ば流しつかはしてければ、女は御息所まかでさせ給ひ、つちくらにこめてしをり給へれば、藏にこもりて泣くく、

海人のかる藻に住む虫のわれからにねをこそ泣かめ世をば恨みじ

と泣きをり。此の男は人の国より夜ごとに来つゝ、笛をいと面白う吹きて声はあはれに歌ひける。かゝればこの女、藏にこもりながらそれにぞあなると聞けど、会ひ見るべきにもあらでなむ有りける。

さりとともと頼むらんこそ嬉しけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひおり。男は女し会はねばかくしありきつゝ、人の国にありきて歌ふ。

いたづらに行きては帰る堰なれど見まく欲しさに誘われつゝ

(水の尾の御時なるべし。おほみやすんところは染殿の後なるべし)。
58 (為)

昔心づきて色好みなりける男、長岡といふ所に家造りして住みけり。その隣なりける宮腹に、こともなき女どもの田舎なりければ、田からんとて此の男あるを見て、いみじの好き物のしわざやとて集まりて来ければ、此の男奥に隠れにけり。

荒れにけりあはいくよの宿なれや住みけん人の訪れもせぬ

と言ひければ、

蓍生ひ荒れたる宿の寂しきは仮にも鬼のすだくなりけりとてなん出だしたりける。この女ども、穂拾はんと言ひたりければ、

うち詫びて落穂拾ふと聞かませば我も田づらに行かましものを

59 (天)

昔男、京をいかゞ思ひけん、^{ひんがし}深き山に(住まむと思ひて)、

有り侘びぬ今は限りの山里につまきこるべき宿求めてんかくなんといいたう病みて死に入りたりければ、面に水注ぎなんどしたりければ、生き出でゝ

我が上に露ぞ置くなる天の川とわたる舟の櫂の掣かと言ひて生き出でたりける。

78 (為)

昔きたのこと申すおはしましけり。失せ給ひて後、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原常行と言ふ人みますがりけり。そのみわざにまうであひて京へ上るさまに、山科の禪師のみこと申すおはします、その山科の宮に滝落し、水走らせなどして面白う造れるにまうであひて、年頃よそにつかうまつれど間近くはいまだつかうまつらず、今宵はここにさぶらはむと申し給ふ。御子喜び給ひて、夜のみけしのまうけをせさせ給ふ。さるにかの大将の出でゝたばかり給ふやう、宮仕への初めに直やはあるべき、三条の大御幸有りし時、紀の国の千里の浜に有りけると面白き石奉れりき、大御幸の後に奉れりしかば或る人の御曹司の前の道に据へたりしを、御子の好み給ふ物なり、この石をか面白き石奉らんとしたまひて、御随人舍人して取りに遣はす。いくばくもなく持て来ぬ。この石、聞きしよりは見るは勝る。これをたゞに奉らばすぐなるべしとて、人々へに歌詠ませ給ふ。右馬頭なりける人、青き苔を刻みて蒔絵の方

に此の歌を付けて奉れりける。

飽かねども岩にぞ代ふる色見えぬ心を見せむ由の無ければ
となん詠める。

79 (為)

昔、氏の女御に皇子産まれ給へりけり。御産屋に人々歌詠みけり。
御おじなりけるおいきの詠める。

我が門に千尋ある竹を植へければ夏冬誰か隠れざるべき

これはさだかずの御子の、時の人中將の子となん言ひける。

98 (為)

昔おほき大臣と聞こゆるおはしけり。つかうまつる男、長月ばかり、
桜の作り枝に雉を付けて奉るとて、

我が頼む君がためにと折る花は時しも待たぬ物にぞ有りけ
る

と詠みて奉りたれば、いとかしこくおかしがり給ひて、御使に祿賜
りけり。

95 (小)

昔、二条の中宮につかうまつる男有りけり。また女のつかまつるを
(常に) 見交はして (よばひけり。いかでか) 物越しにて対面して、
いとおほく思ひつめたる事 (も少し) 晴るけんと言ひければ女、いと
忍びて物越しにて (七月七日) 会ひにけり。物語 (なんど) して
男、

彦星に恋は勝りぬ天の川隔つる橋架を今は止めてよ
(これをおかしと思ひけん、会ひにけり)。

D (天)

昔今の長門西院といふ所に住む人有りけり。その人市になん出でたりける
に、女車の有りけるを言ひもていきて (とかくをかしきことなん言
ひつきて)、御住処は何処ぞと (言ひければかくな) 言ひをこせた
りける。

我が宿家は雲井の峰に高ければをしふとも来んものならな
くに

(と言へりければ) 男、

かりそめにそふる心し深まのちからければなどか雲井も訪ねざるべ
き

と言ひて (これもかれも) 別れにけり。

23 (絵)

昔鄙わたらひしける人の子ども、井の端に出でつゝ遊びけ
るを、大人になりければ、男も女も恥じ交はしてありけ
れど、男はこの女こそ得めと思ひ、女はこの男をこそと思
ひて、親の合わせるを事も聞かでぞありける。さてこの隣
の男のもとよりかく言ひをこせたりける。

筒井筒井筒にかけしまろがたけ老いにけらしな相見ざる
間に

女返し、

比べこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か上ぐべ
き

と言ひて本意のごとくに会ひにけり。さて年経る程に女の
親なくて頼りなくなりければ、諸共に言ふ甲斐なくてあ

らんやはとて、男は河内国、高安郡に言ひ通ふ所いできに
ければ、さりければもとの妻、悪しと思へる景色もなく
暮るれば出だしたてゝやりければ男、こと人に心あはせて
やるにやあらんと思ひ疑ひて、前裁の中に隠れて彼の河内
へ往ぬる顔にて見いたりければ、この女いときよげに仮相
じてうち眺めて詠める。

風吹けば沖つ白波立つた山夜半にや君が一人行くらん
と詠みけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて河内へも
さく通はずなりにけり。まれく彼の高安に行きてみれ
ば、初めこそ心にくもつくりけれ、今は打ち解けて、髪を
頭に巻き上げて面長なる女の手づから戴取りてけこの器
物に盛りけるを見て、心憂がりて行かずなりにけり。され
どこの女、大和の方を見遣りて、

君が方見つゝもおほらん生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

117 (為)

昔帝、住吉の行幸し給ひしに(詠みて奉り給ひける)。

我見ても久しく成りぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらん
かの神あらはれげいじ給ひて、

むつまじと君は知らじな瑞垣の久しき代より祝ひ初めてき
このことを聞きて在原業平、住吉にまうでたりけるつひでに(詠
みたりける)。

住吉の岸の姫松人ならば幾代か経しと問はましものを
と詠めりけるに、翁いぢのなり悪しき出でゐて愛でゝ返しつ。
衣だに二つありせば赤肌の山に一つは貸さましものを

と詠みて消え失せにけり。後に思えば御神になんをはしましけ
る。

72 (為)

昔男、伊勢の国なりける女を又はえ会はで、隣の国へ行くといみ
じう恨みければ女、

大淀の松は辛くもあらなくに恨みてのみもかへる浪かな

24 (絵・切)

昔男女有りけり。男宮仕えずとて別れを惜しみて行きけるまゝに、
三年まで来ざりけり。待ち侘びたるほどに、いと懇ろに言ひける
人に今宵会はんと契りたる程に、此の男来にけり。此の戸開け給
へと叩くに、女まづ戸をば開けで歌を詠みて出だしけり。

あらたまの年の三年を恋い侘びてたゞ今宵こそ新枕すれ
と言ひ出だしたりければ男、

梓弓真弓つき弓年を経て我がせしがごとうるはしみせよ
と言ひて男帰りにけり。女いと悲しうて追行けど、え追いつか
で清水のある所に伏しにけり。そこなる岩に、をよび(食い切り
てそ)の血して書き付く。

相思はでかれぬる人を留めかね我が身は今ぞ消え果てぬ
る

(と書きていたづらになりけり)。

99 (天・切)

昔右近馬場のでつがひに、立てりける車の下簾の開きたりけるよ
り女の顔の透きたりければ中将なりける人、

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日や眺め暮

らさん

女返し、

見も見ずも誰と知りてか恋ひらるゝおぼつかなみの今日の眺めや

又男返し、

知り知らず何かあやなくわきて言はん思ひのみこそしるべなりけれ

116 (小)

昔、すゞろにて陸奥にまで惑ひありきける男、京に思ふ人の許に言ひ遣れりける。

波間より見ゆる小島の浜ひさし久しくなりぬ君に会ひ見て

(何事も皆長く直りにけりとなん言ひやりける)。

74 (天)

昔男、女をいたく恨みて、

岩根踏み重なる山は遠へだてねどいあらねどもいけれど飽かぬ日多くも恋

ひわたるかな

返し

海人の住む道みちのしるべにあらぬ身を恨みんとのみ人の

言ふらん

75 (為)

昔男、伊勢の国にゐて行きてあはんとわりなく言ひければ

大淀の浜にかりほす見るからに心は風ぎぬ語らはねどもと言ひてましてつれなかりければ男、

袖濡れて海人のかりほすわたつうみの見るを会ふにて止ま

女

むとやる

岩間よりおふるみるめし常ならば汐満汐間は甲斐もあらなん

又男

涙には濡れつゝ絞る世の人のつらき心は袖の雫か

G (天)

昔(男)、奈良の京にあひ知りたる人とぶらひにいきた(りけ)るに、友達ともだちの許に(は)消息しよきを始めて、恨みて文ふみおこせたりける

人の許に

春の色はるいろの至り至らぬ里さとはあらじ咲ける咲かざる花の見ゆるか

I (天)

昔(男)、えうまじかりける恋こひひ詫わたりびて

我が宿しゆくに撒まきしなでしこいつしかもはなに咲かなんあしたく見ん

J (小)

昔男、すゞろなる道を辿り行くに、駿河の国、宇津の山口に至りて、我がいらゝとする道はいと暗う細きに蔦楓は茂り、物心細くおもほへて、すゞろなる目を見る事と思ふに、過ぎ行くに差し会いたり。かゝる道はいかにかいまする、と言ふを見れば見し人なりけり。京にその人の許にとて文書きて付く。

中空に立ちゐる雲の跡もなく身のいたづらになりぬべき

かな

とてなんつけゝる。かくて思ひ行くに、

駿河なるうつみの山の現にも夢にも人に会はぬなりけり
と思ひ行きけり。

121 (為)

昔男、梅つばより人のまがへるを見て、殿上にさぶらひける折に、
鶯の花を縫ふてふ傘もがなぬるめる人に着せて返へさむ

62 (為)

昔見ける女、心かしこくやあらざりけん、はかなき人のことにつ
けて、人の国なりける人に使はれて、元見し人の前に出でて物食
わせなどしけり。夜さり、ありつる人給へと主に言ひければ、をこ
せたりける。男、我をば知らずやとて、

古の匂ひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな
と言ふを、いとはづかしと思ひていらへもせでゐたるを、などてい
らへもせぬと言へば、涙のこぼるゝに目も見えず、物も言わずと言
ふ。

これや此の我にあふみを逃れつゝ年頃経れどまさり顔なみ
と言ひて衣脱ぎて取らせけれど、捨てゝ逃げにけり。いづち往ぬら
んと知らず。

6 (絵)

昔男有りけり。えうまじかりける女を年経て夜這ひわたり
けり。からうじて心を合はせて暗きに盗みて、章河といふ
河を負て行きければ、草の上に置きたりける露を見て、彼
は何ぞと男に問ひけり。行き先もいと遠く、夜も深かり

ければ、鬼棲む所とも知らずして、雨もいたく降り、神も
おどろおどろしう鳴りければ、あばらなる倉のあるにめを
ば奥に押入れて、男は弓やなぐひを負ひて戸口にゐたり。
はや夜明けなんといひゐたる程に、此の女をば鬼はやたゝ
一口に食ひて失せにけり。あなや／＼と言ひけれど、神の
なる騒ぎに此の男え聞かずなりにけり。やう／＼夜の明け
行くに見れば、ゐて来つる女もなし。あしずりをして泣き
惑へども、甲斐なければかく詠む。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へてけなまし物を

B (天)

昔男、女を盗みて行く道に、水のある所にて飲まんと問ふに、うな
づきければつきなども具せざりければ手に結びて飲ます。さてゐて
のぼりにければ、(男はかなくなりければ)、元の所に帰り行くに
(かの) 水飲みし所にて、

大原やせがひの水を結びつゝ、あくやと問ひし人はいづら
は

と言ひて消へにけり。あはれ／＼(と言へど甲斐なし)。

K (小)

昔男、すゞなる所に行きて夜明けて帰るに、人々言ひ騒ぎけ
れば、

月しあればあらはんことも知らずして寝てくる我を人
や見つらん

この事どもは、

庭もせに生ふるあさてかつみはやすはこやの刀自の先の

如しも

36 (小)

昔、忘れぬるなめりと問事しける女に男、

谷せばみ峰まで生える青つゞら絶えんと人に我思はなくに

女

いつはりと思ふものから今さらに誰がまことをか我は頼ま

ん

L (天)

昔、在原行平といふ人いましがりけり。女の許に、

思ひつゝをればすべなしむばたまの夜になりなば我こそ行

かめ

女

こぬ人を今もや来ると待ちし夜の名残は今もいねがてに
する

M (天)

昔男有りけり。わりなきことを思ひ出でて、或る所にやりける。

夕月夜曉方の朝かけに我が身は成りぬ恋のしげさに

とありけれど、いと難くなりけり。

N (天)

昔もの思ふ男、目を覚まして外の方を見出して臥せるに、前栽の
中に虫の鳴きければ、

かしがまし野もせにすたく虫の音や我だに物は言はでこそ
思へ

71 (小)

昔男、伊勢斎宮に内の御使ひにて参りければ、彼の宮に好き事言ひ
ける女、私事にて、

ちはやぶる神の斎垣も超えぬべし大宮人の見まく欲しさに

男

恋しくは来てもみよかしちはやぶる神の諫むる道ならなく

に

女、旅人を如何思ひけん、

神風や伊勢の浜荻をりふせて恋寝やすらむ荒き浜辺に

119 (大)

昔、女のあだなる男の形見とて置きたる物どもを見て、

形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらまし物を

O (小)

昔色好む人有りけり。男も様変らず諸心にて、色好む女、これを
いかに得んと思ふに、女も念じわたるをいかなる折にかあ

りけん、会ひ見けり。男も女もかたみにおぼえけれど、我もいか
で捨てられじと心の暇なく思ふに(なん有りける)。猶女、出でて

往なんと思ふ心付きて、

いざ桜散らば散りなん一盛り慣れなば憂き目見えもこそ
すれ

と書き(付け)てなん往にける。驚きて見れば、なければいとね
たくて(をりけり)。

いさゝめに散りぬる桜なかなむのどけき春の名をも立つ
めり

(と言へど甲斐なし)。

92 (天)

昔恋しさに来て帰れど、消息もせである。

葦辺漕ぐ棚なし小舟いくそたび漕ぎ帰るらん知る人なしに

P (天)

昔、数奇者ども集まりて歌詠みけるに、かはたけを或る男、

小夜ふけてなかばたけ行く久方の月吹き返せ秋の山風

R (神)

昔、色好み絶えにし人の許より、

思ひつゝ寝ればや人の見えつらん夢と知りせば覺めさら

ましを

S (神)

昔男、来て帰るに秋の夜も空しくおほえければ、

秋の夜も名のみなりけり会ふと会へばことぞともなく明けぬるものを

Q (天)

昔男、はるかなる程を行きたりけるに、筑紫の(つと)人請ひ(た

り)けるに、いろ皮やるとて、

筑紫よりここまで来ればつともなしたちの緒皮のはしのみ

ぞある

(所の名なるべし)。

66 (絵)

昔男、摂津国にしろ所有りて下りけるに、兄弟友達引き連れて、難波のかたに往にけり。渚を見れば船ども有り。それを見て、

難波津を今日こそ水の浦毎にこれやこの世をうみわたる船

これをあはれがりて人々帰りにけり。

F (小)

昔色好みける女有りけり。飽き方になりける男の許に(言ひやりける)。

今はとて我が身時雨に降りゆけば言の葉さへぞ移ろひにける

返し(きのさねふん)、

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまに／＼散りも乱れめ

C (小)

昔男女、起き伏し物を言ひて、猶如何おほえけん、男、

心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからや恋しかるべき

88 (為)

昔いとわりなきにはあらぬ人、これかれ友達どもの集まりて、月を見てそが中に一人、

あぢきなく月をもめでじこれぞ此の積もれば人の老いとなるもの

60 (為・切)

昔男有りけり。宮仕へ忙しくて心もまめならざりけるほどに、家刀自に思はんといふ人に付きて、人の国へ行きけり。此の男、宇佐の使にて行きけるに、或る国の祇承の官人の妻にてなんあると聞きて、女主にかはらけ取らせよ、さらずは飲まじと言ひければ、かはらけ取らせて出だしたりけるに、肴なりける花橘を取りて使の詠める。

皇月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

と言ひけるにぞ思ひ出で、尼になりて山に入りてぞあなる。

37 (為・切)

昔、色好みなりける女に会ひ知れりけり。を語らひてうしろめたくや思ひけん、

我ならで下紐解くな朝顔の月影見えぬ花になければ夕影得たぬイはありともイ

返し

二人して結びし紐を独りして会ひ見んまでは解かじとぞ思

ふ

109 (小)

昔男、友達の人を失へるに言ひやりける。もとへイ

花よりも人こそあだになりにつれにけれいづれを先に恋ひんとか

見し

E (為)

昔男、ある人に忍びて会ひ通ひければ、男に或る人、

中空に立ちある雲の跡もなく身のはかなくなりぬべき哉

(と笑ふ人も有りけり)。

105 (為)

昔男、かくては死ぬべしと言ひやりければ女、

白露は消なば消なゝん消えずとて玉に貫くべき人もあらじ

を

と言へりければ、いと恨めしと思ひけれど、志はいや勝りなりけり。

30—28 (皇)

昔男、はつかなりける女の許に、

会ふことは玉の緒ばかりおもほへてつらき心の永く見ぬら

ん

と言へりてまた程経て、

などてかく会ふごかたみとなりけん水も漏らさじと契り結びイ

しものを

106 (為)

昔男、皇子たちの逍遙し給ふ所に詣で、竜田川のほとりにて、

ちはやぶる神代も聞かず竜田川唐紅に水くゝるとは

61 (為)

昔、筑紫まで行きたりけるに、これは色好むといふ好き者と簾の内

なる人の言ひければ、

染河を渡らん人のいかでかは色になるてふことのなからん

女返し、

名にし負はゞあだにぞ有るべきたはれ島浪の濡れ衣着んと

言ふなり

97 (為)

昔堀河のまうちぎみと申す、いますがりける。四十の賀、九条の殿

にてせられける日、中将なりける翁、

桜花散りかひ曇れ老いらくの来んといふなる道惑ふべく

100 (為)

昔男、弘徽殿の狭間より渡りければ、或るやんごとなき人の局より、

忘れ草を忍ぶ草と言ふとて出ださせ給ひければ、賜りて、

忘れ草生ふる野辺とは知るらめどこは忍ぶなり後も頼まん

50 (為)

昔男有りけり。恨むる人を恨みて、

鳥の子を十ずつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは
と言へりければ女、

朝露は消え残りてもありぬべし誰かこの世を頼み果つべき

また男、

吹く風に去年の桜は散らずともあな頼みな人の心は

また女、

行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

あだくらべ、かたみにしける女の忍びありきするがごとくなるべし。

63 (為)

昔世心付けりける女、いかで心情けあらん男会ひてしがなと思へど、
言ひ出でんもたよりなさに、まことならぬ夢語りをす。子三人呼び
集めて語りけり。二人の子は情けなくいらへて止みぬ。また三郎な
りけるなん、良き御男ぞ出で来んと合はするに、この女気色いと良
し。こと人は情けなし、いかでこの在中将に会はせてしがなと思ふ
心有りて、狩しありきけるに会ひて、馬の口を取りてかうくなん
思ふと言ひければ、あはれがりて来て寝にけり。さて男見えざりけ
れば女、男の家に行きて垣間見けるを、男はほのかに見て、

百年に一年足らぬつくも髪我を恋ふらし面影に立つ

とて馬に鞍をかけて出で立つ気色を見て、むばらからたちにかゝれ
て、家に来てうち臥せり。男はかの女のせしやうに、忍びて立てり。
と見て嘆きて寝とて、

狭筵に衣かたしき今宵もや恋しき人に会はでかも寝ん

と詠みけるを、あはれと見てその夜は寝にけり。世の中の例として、
思はぬをば思はず、思ふをば思ひける。この人は、思ふをも思はぬ

をわけぢめ見えずなん有りける。

73 (小)

昔、そこに有りとは聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女の辺り
をありきて思ひける。

目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとの君にぞあ
りける

11 (絵)

昔、東の方に行きけるに、友達に道よりをこせける。

忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月の巡り合ふまで

(はやし よしろう・三十三回生・高知女子大学教授)